

諸流  
秘傳

生花早指南後編

全







姓結城名金邊字龍洲吳謂英寛

序

佐藤八郎

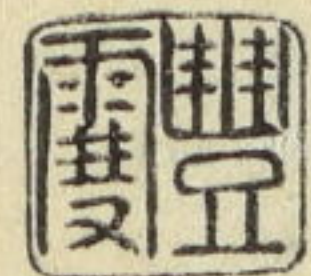
養壽齋挿花の冊以著前編已成て  
普く世に陳く其編と閱るふる字千花  
類んや欲る者以てくは授き道びく事  
嬰児の食と與ふが如く標車は縁以花とが  
たゞ指教の爲る要なるを方歎賞す  
法も奥旨は傳授するも亦よく好む  
早をさと然るを愈よ告其遺傳以  
類んや久壽ふ皆 早田淳圃以彫る心を



入る見者者礎石の働くは玉例に不家  
かん徒よや母こと又育まれば罪よわぶらやも  
於是於に秘画の并く真書投と頼平  
と持出玉に授旦壳毫と下し其残権を  
拾ひて流編とらひて了

享和元年秋

宝廩前 德豊雪記



插花早指南

卷中目録

後編

- 一 四季挿華式 附口傳 指圖五十瓶
- 一 客よ花不望する時心得の事 附花盒飾圖式
- 一 花器と薄板取合の事 一 挿花床を置榻の度
- 一 花基れ心得 一 函撥と用る心得の度
- 一 花よ露うり時節の事 同露うるる花器れ度
- 一 高等所の花挿方心得の度 一 陰陽の度 付挿方
- 一 真行草と心説 一 花器見えの度
- 一 名物の花器挿華 一 換撥れ花とる度



- 一 掛物かきもの 対たいく 花挿はなさ 同画どうがの縁えん取とり合あて挿さ 夏なつ
- 一 挿花さか用よう捨すの夏なつ十じゅう五ご條じょう 并ならび傳でん
- 一 花はなの物もの葉は斗と糸いと有あ物もの花はなばり挿さと夏なつ
- 一 添その入い得え并ならび挿さ方かた 一 雜ざ花はな取とり挿さと入い得え
- 一 寶物たからもの菓くだ取とり挿さと事こと 一 花はな形かたちき物ものさし事こと
- 一 夏なつ葉は林はやし葉は挿さ方かたの傳でん

一 極ごく松しょう傳でんの部ぶ

河骨かこつの傳でん 畫え式しき 水仙すいせんの傳でん 畫え式しき 萬ま年ねん青せいの傳でん  
 葉は蘭らんの傳でん 紅葉こうじの傳でん 丘かみ物もの取とり物もの一いつ瓶びん挿さ傳でん  
 紅こう葉はの傳でん 一いつ瓶びん挿さ傳でん 庭てい葉はの取とりと挿さ傳でん

以上 附つけ録りやく 挿花さかの由よし来き北きた夏なつ



元日梅えんじつうめ 萩はぎ挿さ子こ

前まへ編へん 枝えだ葉は瓜うり取とり瓜うりの由よし来き北きた夏なつ 但たゞ一いつ元日えんじつ挿さ傳でん



若雲 水仙



初子の目三拵  
君代と母をよおすに  
ふ日の松のふとをほろけり

椿 賀籠



雲橋と用ゆる  
奥三つと記す

彼岸花



花はくまらぬ物なりと  
くまらぬふまをへり  
花骨に下

真のふと  
花はくまらぬ物なりと  
くまらぬふまをへり  
花骨に下  
如



葵子花

柳方お編まり



藤

花の桶のまはり  
挿しおれども好まじ

連翹

一枝の志はり  
お入れば  
お入れば  
お入れば





濱 菊



一編  
うらうら花をむ

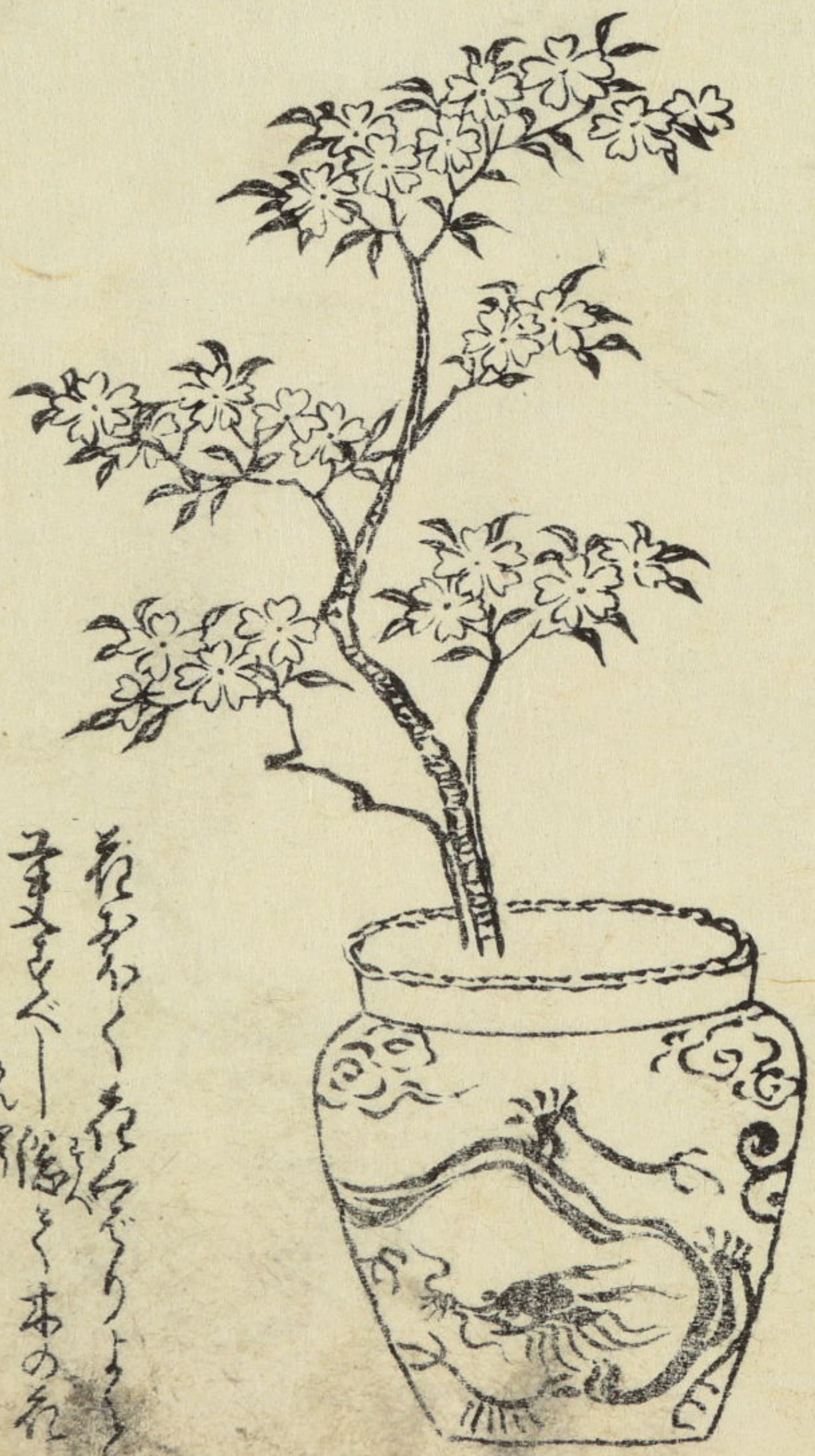
姫百合



まいた姿うらうら

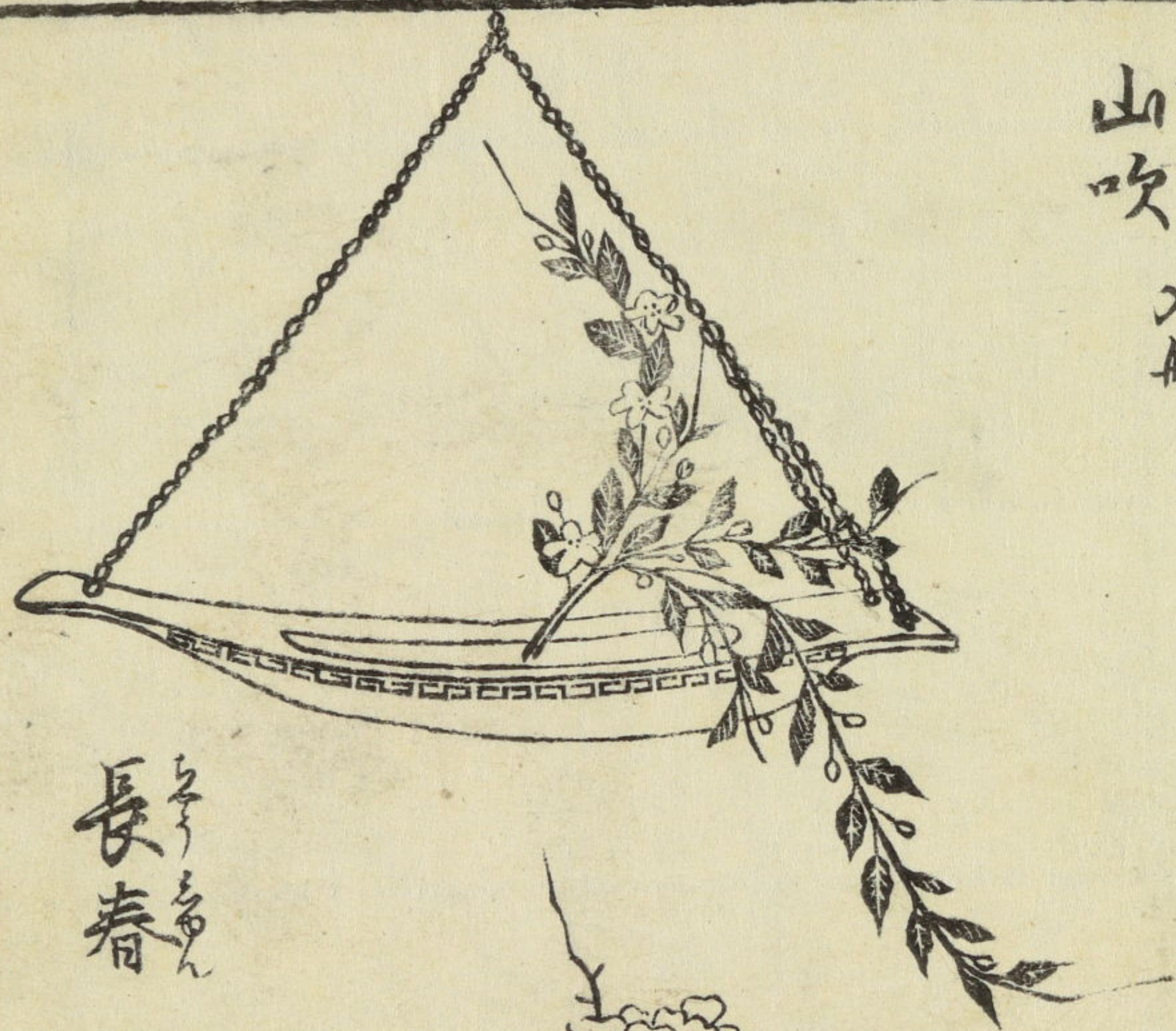
山櫻

梢の姿うらうら  
挿方をと付べ



花をうらうら  
まいた姿うらうら  
枝のうらうら





山吹  
吹入  
船

長春

奥に花の幸を得



躑躅



小年  
又粉



牡丹



大籠に挿さるる合ふり

己前編毒草の部有ふども程  
獨樂皆古く若くは位を畫とす

馬蘭

一名一八



馬蘭の糸係は分  
わさるるあふべ



花苧め

花基を用い幸奥に記す

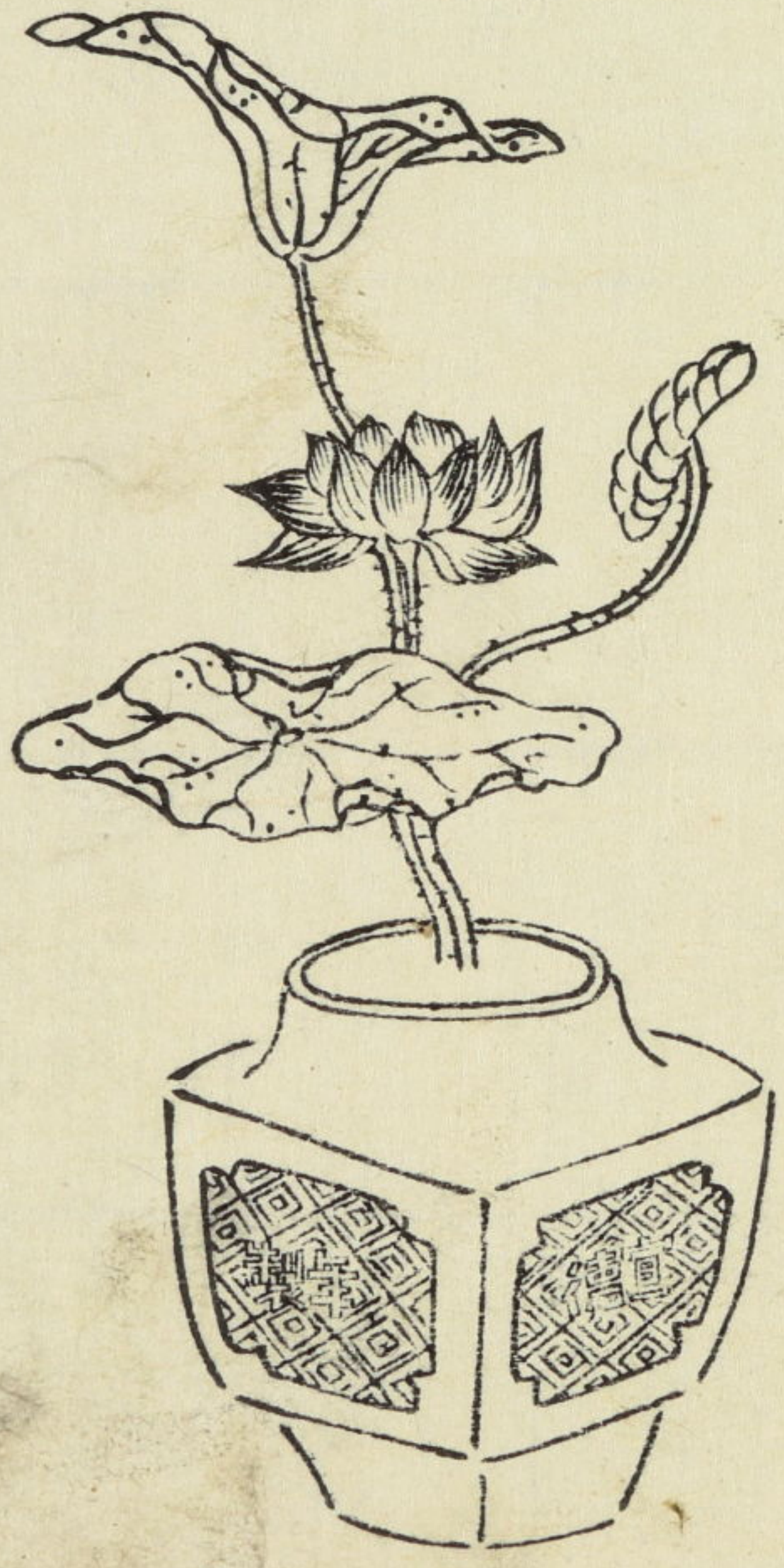


極子 本名瞿麥



蓮

巻葉の上の一葉よん成てあり  
さき下の一葉よん成てあり



花粒の玉を花偏に  
りとも蓮の出生し  
一花もその下に

花粒の玉を花偏に  
りとも蓮の出生し  
一花もその下に



水葵

二瓶一水の姿  
挿る如き

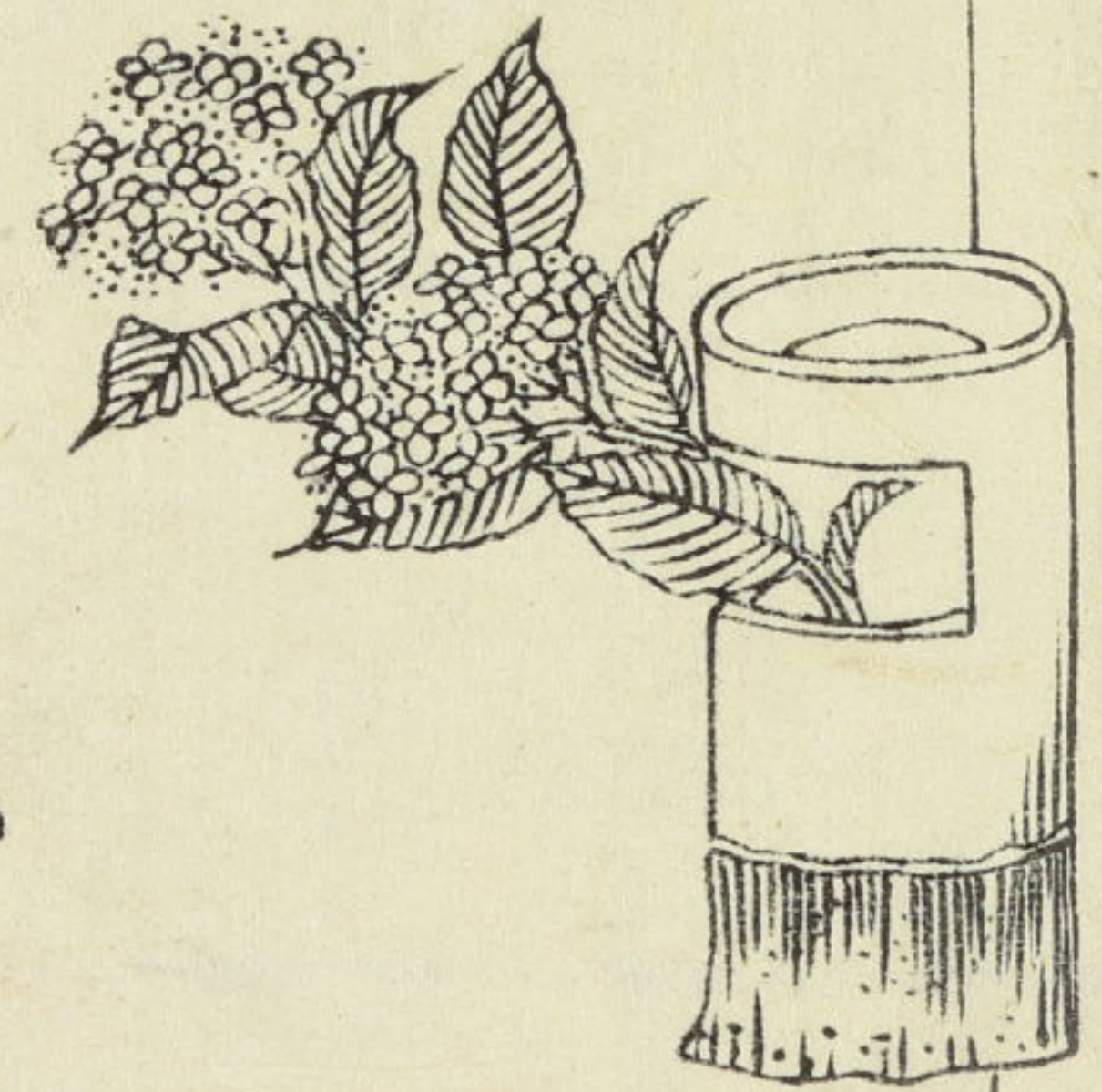
河骨

河骨のさし極楽編  
有とともにも挿奥よ  
極傳とせし



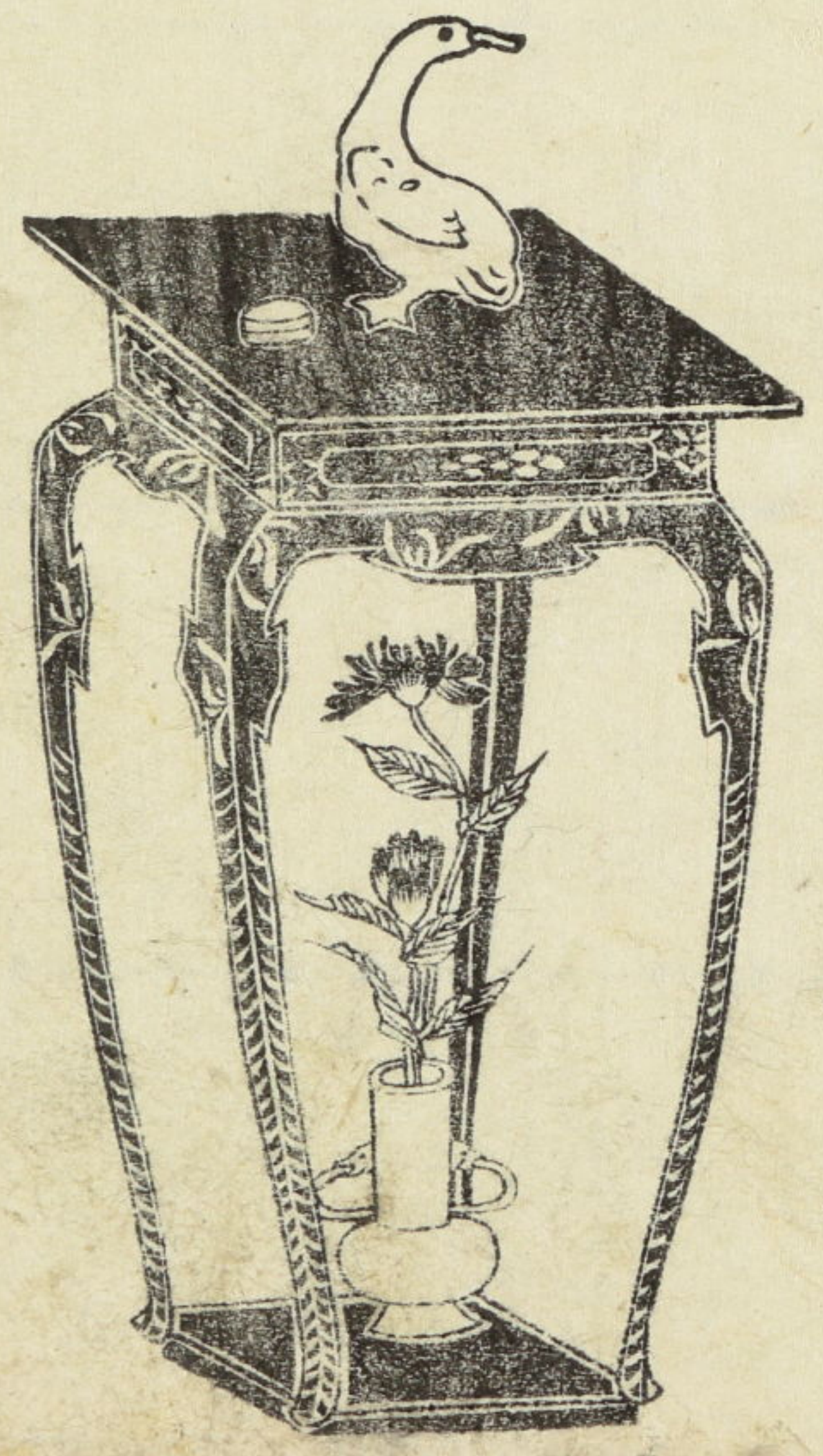
花器の取合  
任意とせし

紫陽花



卓下の花々を  
より挿れを  
せぬや

美人草  
木名嬰子





大菊 一鉢

馬鹽



女房の口傳り  
奥の口傳り

此の葉は  
葉の底も  
葉の根も

業平朝臣

芍薬

葉は  
花の  
葉の

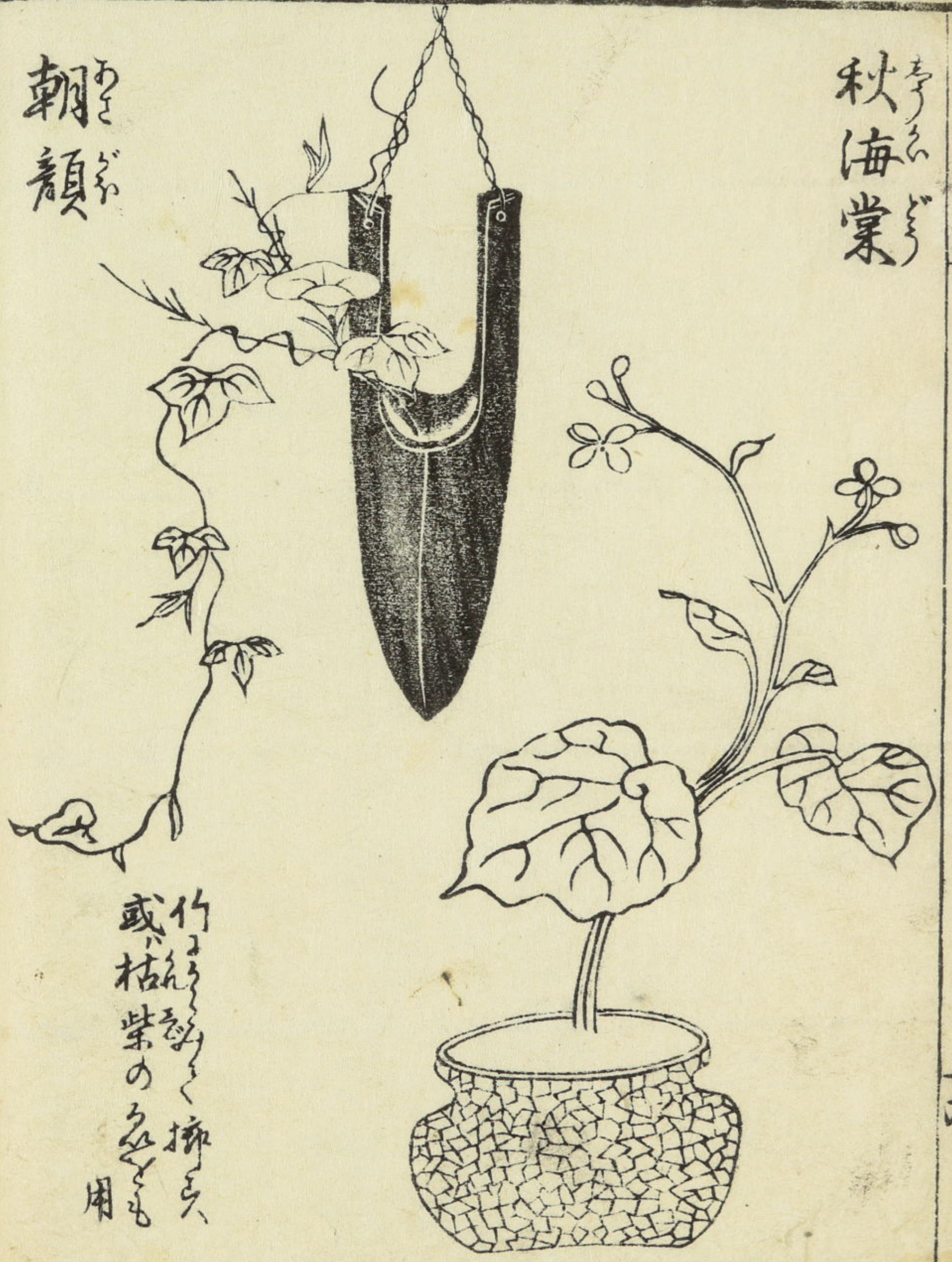




秋海棠 あきあじ

朝顔 あさご

萩 あき



竹 たけ の 葉 は を 挿 さ 入 い れ 用 もち 用 もち 用 もち





女郎花こがら 小菊こぎく



秋の草花あきのくさな 花はな 名な 小菊こぎく 花はな 名な 女郎花こがら

桔梗ききョウ 梗カウ



桔梗ききョウ 梗カウ 花はな 名な 桔梗ききョウ 梗カウ

大菊オオキク



大菊オオキク 花はな 名な 大菊オオキク 花はな 名な 大菊オオキク 花はな 名な

かへびねく出  
くさしやらの  
アとオネの財  
くは番とさ  
エまらへ



紫あま  
死おま



大葉のはひさる葉は陰陽成はけり  
梅庭—陰陽の志と奥子記と

蘭らん

野の葉あきく  
壺う



花器と花瓶の画のとり合  
作意少沢付べし





薄うす

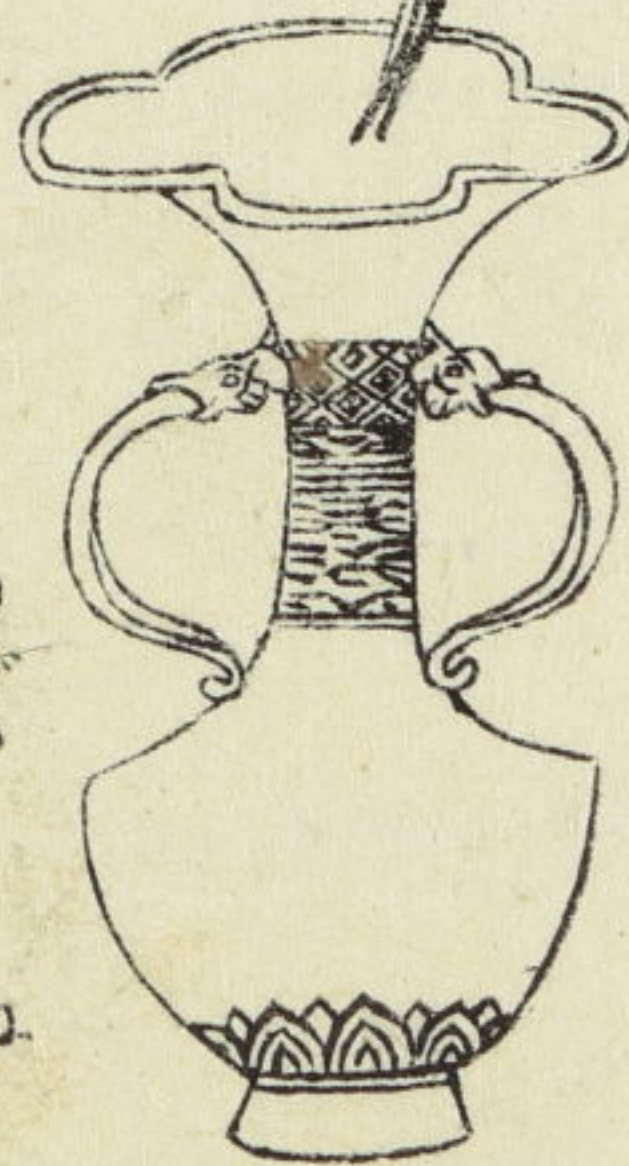
一名尾おし

野の菜な

秋あきのの野の菜なのの姿すがたをを写うつす

小こ菜な

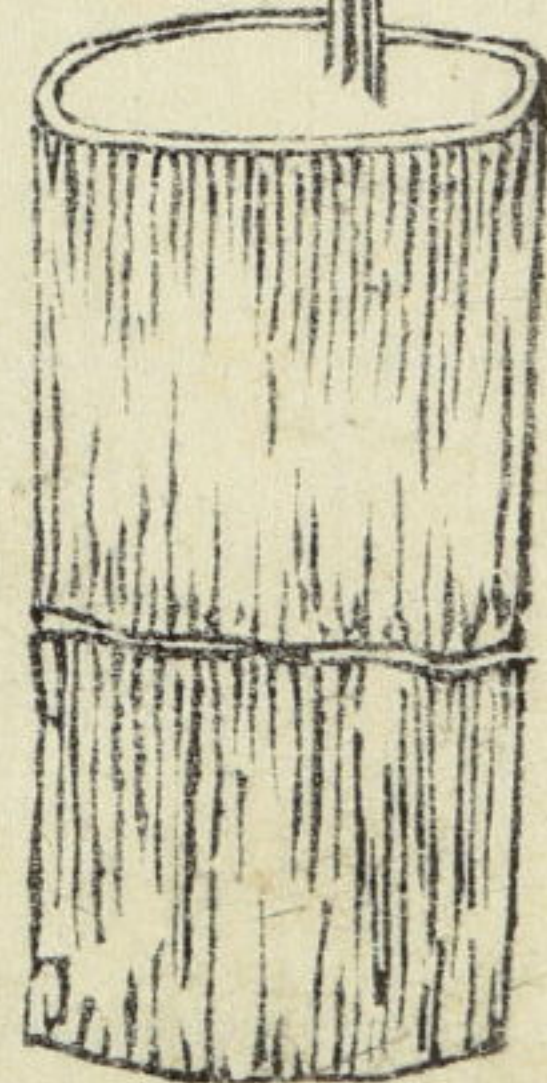
花はなははななとと文ぶんをを拵しらへへばば花はなははななとと文ぶんをを拵しらへへばば花はなははななとと文ぶんをを拵しらへへばば



本ほん芙蓉ふよう



玉たま芙蓉ふようハハ蓮れんのの根ねをを写うつす





紅葉

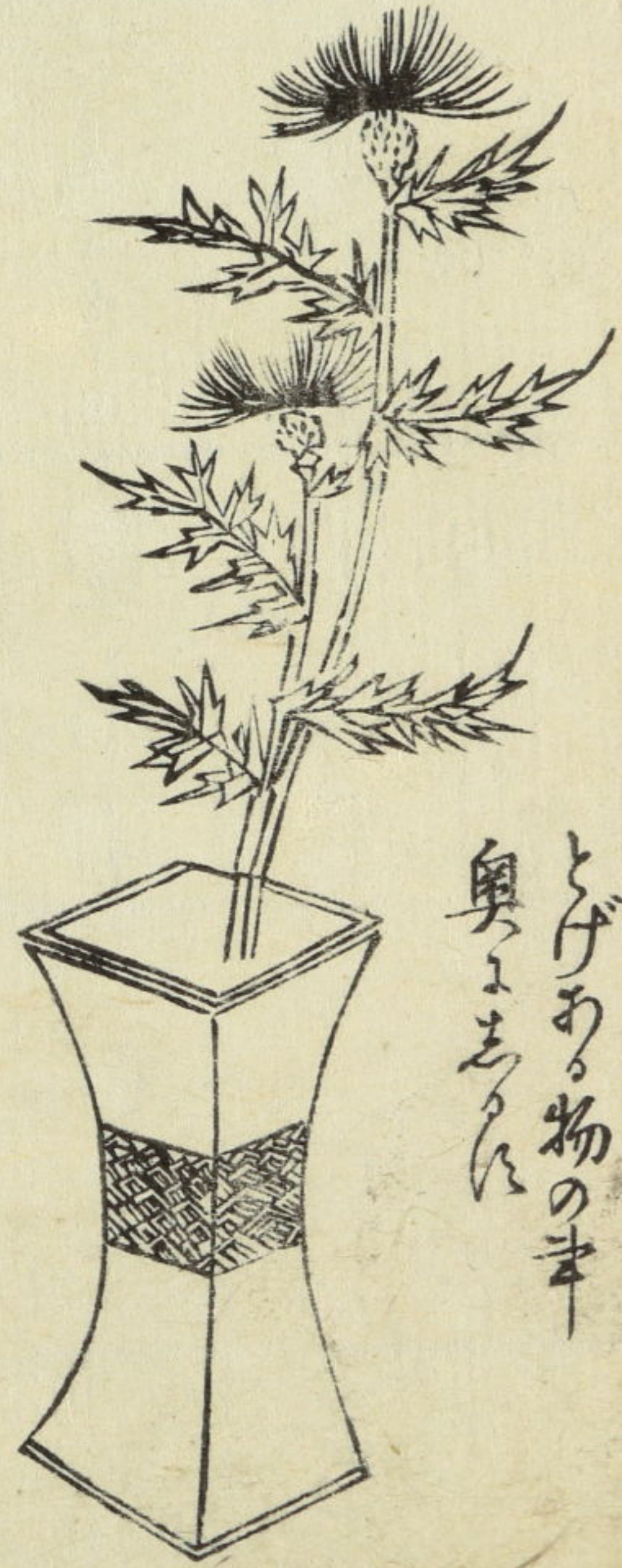


口傳はくよ

青葉はゆげも柳は  
花のき物に半奥に

薊

下野



とげある物の半  
奥よ志るん



水仙

一武敷おわく挿さる  
 時の葉と花のそら  
 けり番と足す時

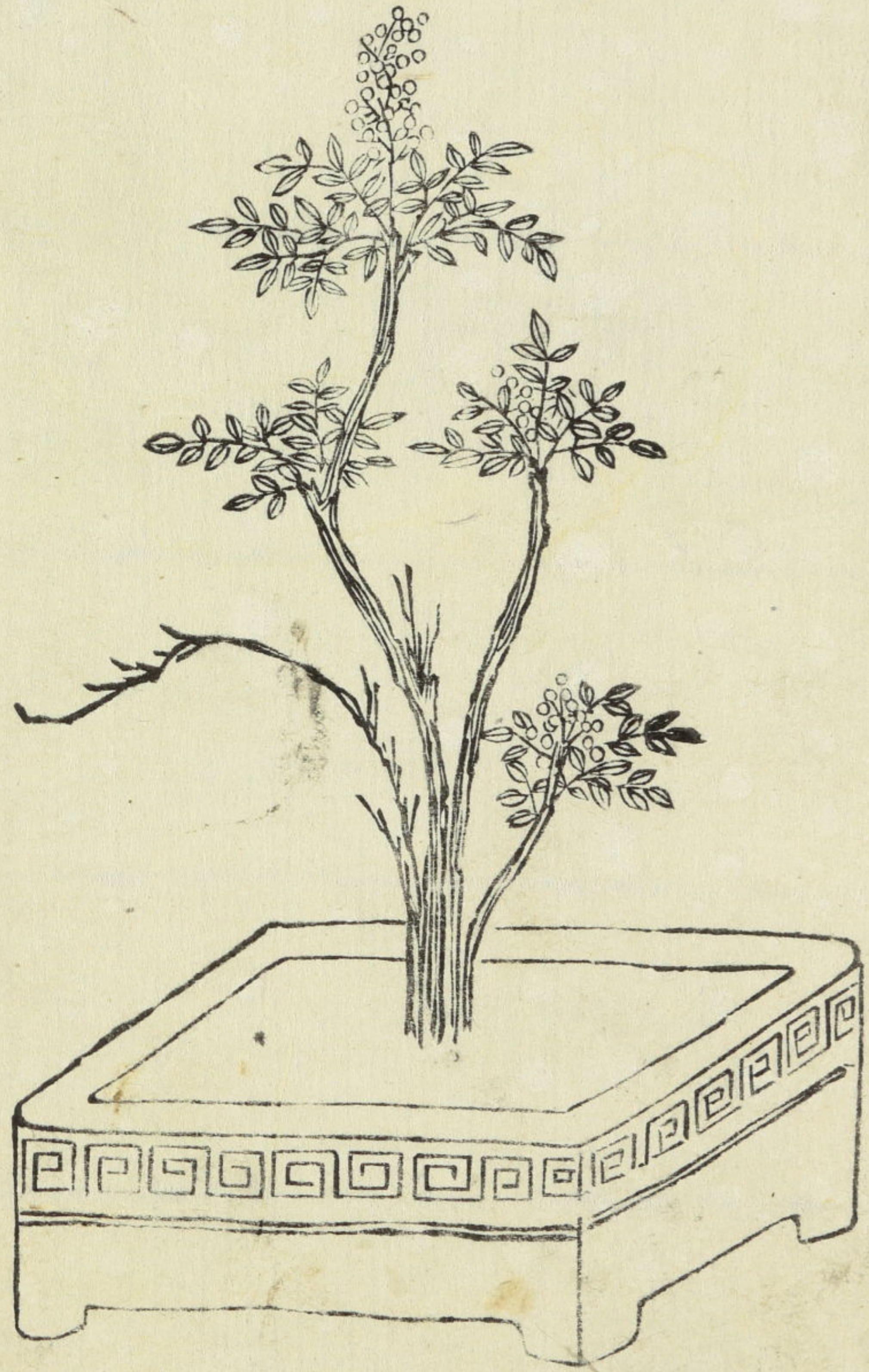


寒菊



水仙の方分編有  
 之とて口傳奥

南天





山人花



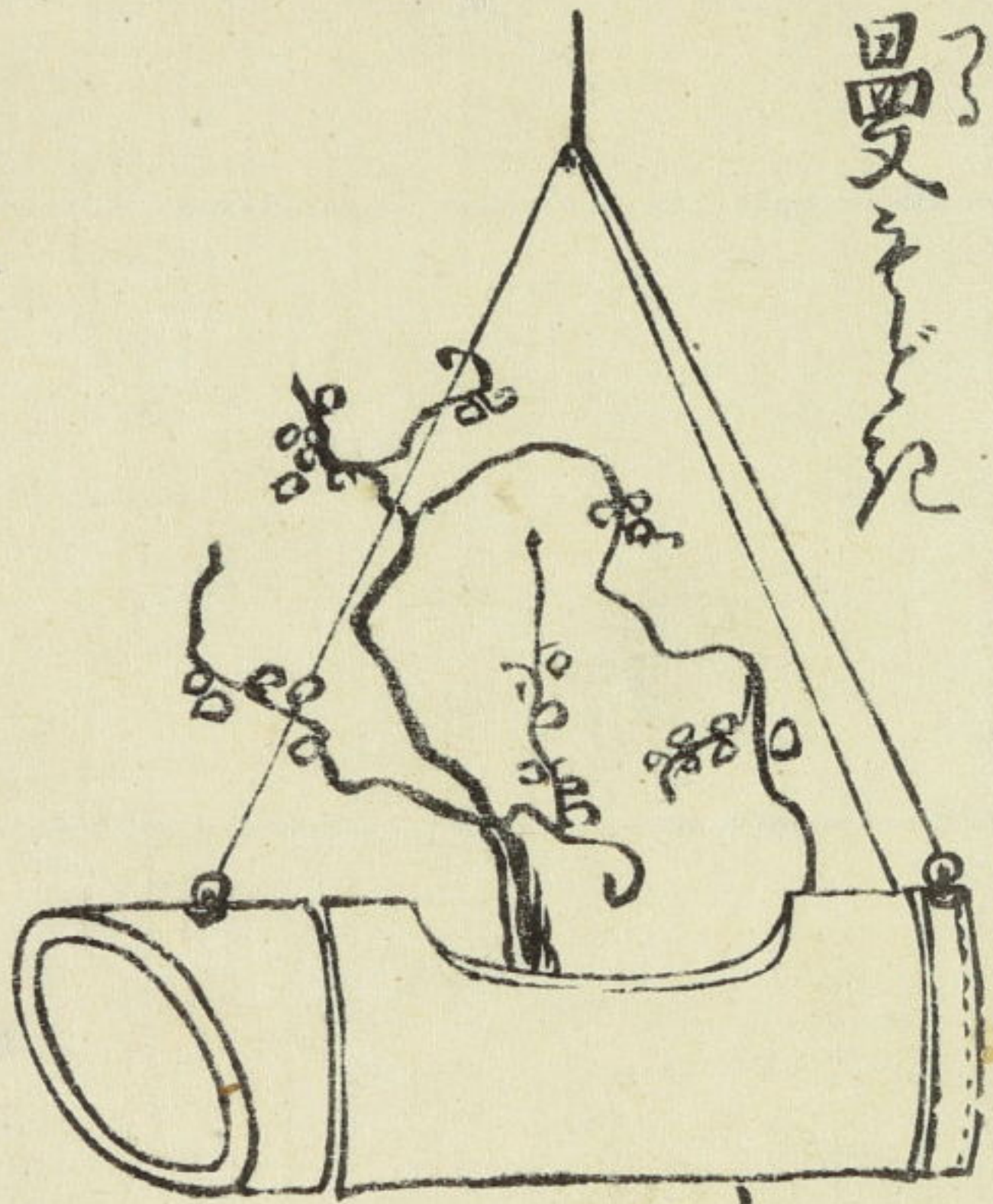
十五

萬年青

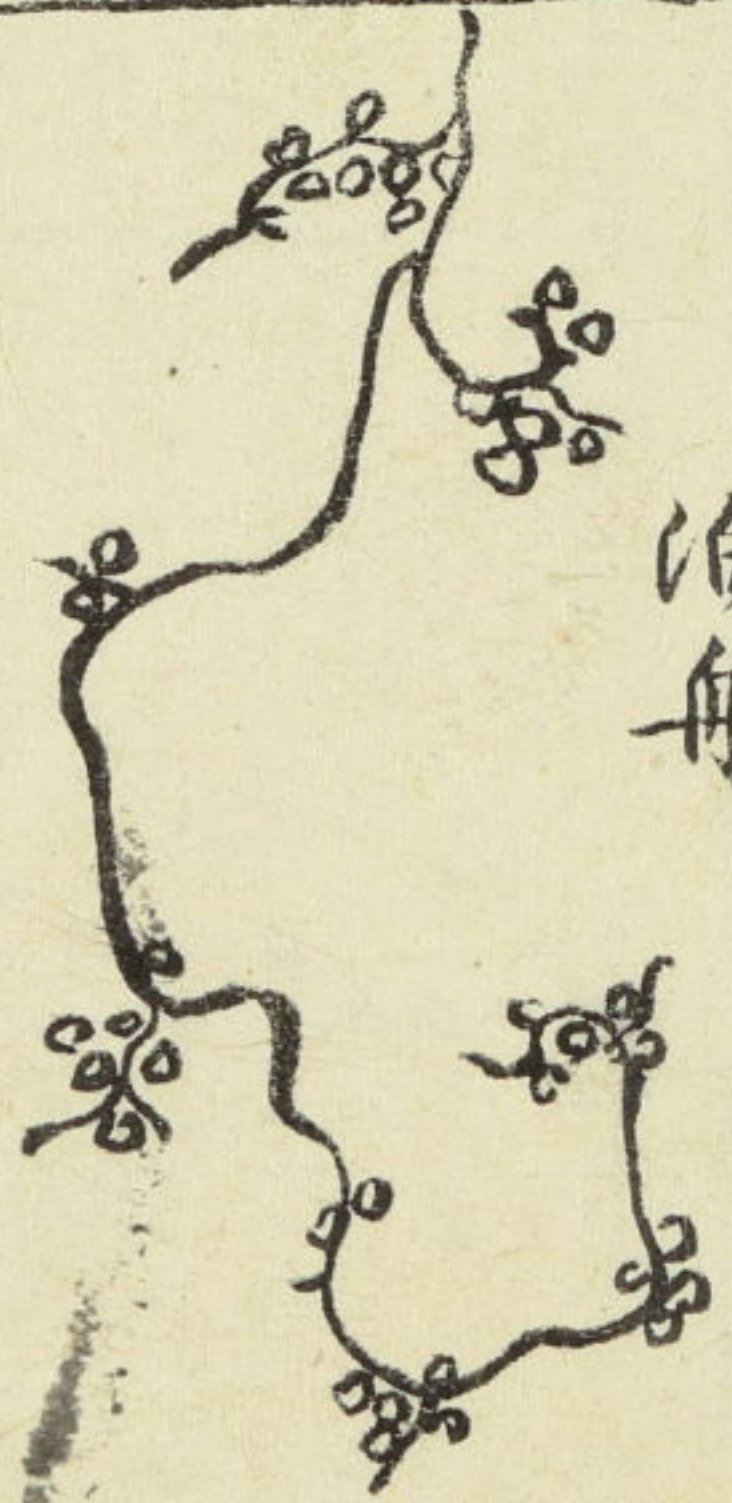
其石より根を  
きりて挿すべし  
葉組多き方の  
口傳ありし者



曼き花



舟



早梅  
又  
冬至梅



春は枝の  
おぼろげな  
花の  
早梅の  
花の  
おぼろげな  
花の  
おぼろげな  
花の  
おぼろげな  
花の

十六



猴さる子こ柳りゅう = 水みづ仙せん

そこのちへ仙せん一瓶いっぺいのまゝに持もてて

葉は 蘭らん

口傳くわでんなり有あ

葉はよ表裏ひょうりどつりく根ねどら  
も付つくもさへ



批ひ葉は

百ひゃく草そう千せん花かはき後のち霜しもよ葉はどら  
根ね車ぐるま心こころ得え有あり



歳とし暮ぐりの夜よよ葉はの色いろ濃こくも  
きり柳りゅうとよとよ又また松しょうの色いろ之の如ごとく

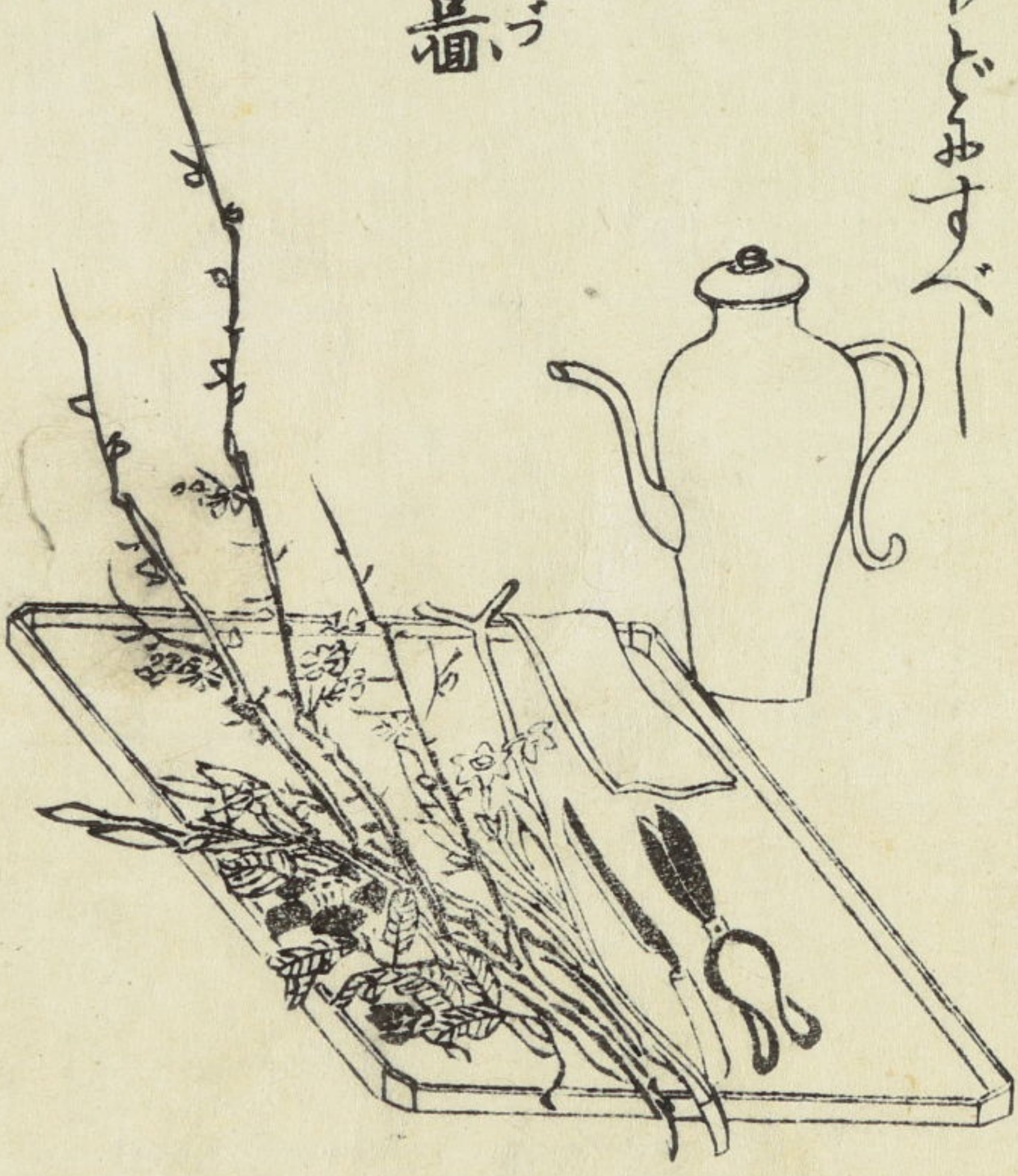


客小挿花所望する時心得の事

客小挿花と不登るる時先花着（水瓜）半寸余り入座居並  
 花盆（花）とせせ扱（さ）ぐ込の木（木）浸（ひ）小刀（小）中（中）瓜（瓜）深（深）さ（さ）座（座）安（安）ん  
 上（上）後（後）一（一）き（き）小（小）俵（俵）ひ（ひ）と（と）客（客）小（小）在（在）り（り）も（も）方（方）に（に）あ（あ）り（り）も（も）た（た）く（く）な（な）  
 次（次）水（水）一（一）よ（よ）水（水）と（と）程（程）く（く）入（入）足（足）も（も）左（左）側（側）へ（へ）並（並）り（り）き（き）川（川）も（も）  
 花（花）の（の）す（す）こ（こ）も（も）手（手）入（入）せ（せ）ば（ば）枯（枯）枝（枝）枯（枯）葉（葉）も（も）き（き）修（修）並（並）込（込）の（の）木（木）も（も）截（截）を（を）  
 中（中）の（の）白（白）麻（麻）き（き）り（り）寸（寸）法（法）定（定）り（り）し（し）  
 を（を）尺（尺）三（三）寸（寸）位（位）と（と）可（可）也（也）以（以）湯（湯）殺（殺）ぬ（ぬ）ぎ（ぎ）ぬ（ぬ）べ（べ）  
 後（後）り（り）水（水）瓜（瓜）程（程）く（く）入（入）る（る）花（花）中（中）の（の）厚（厚）板（板）も（も）と（と）き（き）又（又）也（也）を（を）  
 浸（浸）花（花）巾（巾）も（も）せ（せ）て（て）此（此）の（の）下（下）に（に）次（次）水（水）も（も）指（指）も（も）下（下）に（に）扱（扱）亭（亭）主（主）瓜（瓜）

味（味）と（と）程（程）よく（よく）扱（扱）扱（扱）し（し）え（え）す（す）る（る）一（一）扱（扱）亭（亭）主（主）瓜（瓜）入（入）り（り）て（て）感（感）賞（賞）の（の）  
 あり（あり）し（し）能（能）く（く）と（と）扱（扱）す（す）べ（べ）

客小挿花の器

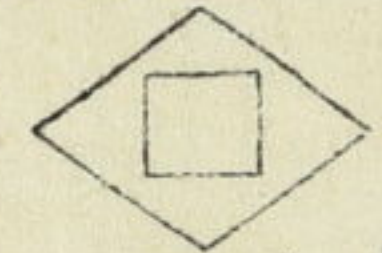


番（番）せ（せ）ど（ど）く（く）勝（勝）り（り）と（と）武（武）三（三）種（種）花（花）瓜（瓜）裁（裁）ぐ（ぐ）如（如）は（は）き（き）り（り）客（客）の（の）高（高）下（下）也（也）



まろせ盆の心得有る一貴人の本具より平人の廣ゆゑ  
又の折敷もくもよ一各指の花分皿の側は蓋へ一又蓋を  
上よおさくもよ一付の上流へはよおさる一

花器と薄板取合の事

丸き花器よりまろせ盆板と用は角なる花器より角板  
うは板取用と但一角形の花器より角なる薄板と用は付  
 此角遠し一く用斗を働有くよ一又すこ一も此  
薄板の方面ともよ用由此名とゆは長は薄板ともゆふ  
但一薄板の置座より用由板座より用由は細きとも  
一説よゆらうも是ある板の板座も用由是ハ板と

板との用すく故あり

挿花座の蓋の事

挿花座の蓋は真中すよりすこ一むらさきよとて  
たぐは一浅き座のむらさきよりすこ程あるがよ一めつとも  
草木の姿もよおさる一高流の事目も定ぬ一

花器の蓋の事

花器の蓋は座よりすこりきる物なり故に座におくは  
但し蓋の蓋は置敷とみる座の花器蓋もよ一

蓋撥取用取事

張座の法付取厭く蓋撥と用は取り座は外よ用は



赤い晴手にしすひりり且壁床の沖汀と打ち響る物之  
花も露風うはけ節は事

夏の花よあまうちのからぬやうく葉はばうり水とさ  
つとけ挿だーむさーゆる系器ともふ手あくる事  
打べー是夏の涼く是するきあかり日月より八月はぐ  
とさー

露うごが花器乃事

信く無花入る器と打ど滴はたふとひびくより  
唐網の花器の中ふちと入斗の外は汗出るとおれは是  
露風打ど又青磁の器より古より打ど舟もくは瓢も

あうら

高き所の花挿方ん得の事

無花の器の類想とく高きおれ花もは挿し時  
又る時花系ももやうらばうりて思は故は陰陽  
見あうらふ挿り

陰陽とひの事

花の表風陽と裏と陰とは系も是は花下又器  
陽と一風陰ともる流も有は此謂は春の陰と毛  
陽風内よむむ故は陰中の陽をとりて散らうら  
よるも陽中の陰なりとて云挿は是の作挿りて



通海わわび挿花の際付即席の興うんご自然の理と  
より用由なり

同陰陽とばちく挿花

陰陽の天地自然の名物とば挿花一瓶の中は華も亦も  
陰陽とばちく挿花り是別物成付く先之花葉大  
表成切やく裏すくぬくは由りすまじく一裏は勝  
つ陰の境なり

真行草とらふ扱の事

至若成真と云ふ法教と行と云ふ成草と云ふ行  
又挿花と云ふ行草なり此一瓶の内は真行草成付る

も同流の若も草挿るは形り是をこそと知れば  
竹の事やとく取めとくばちく真行草と云ふ  
え来業道より出ることふく真の産するがむく行の  
何れもびごとく草のけりみかやと足ありやばちく  
立花め此三段此立花と作るけり此の大方立華の  
方の真とく挿花の通とく草なり是全く名づる  
ばちりやとく挿花の散とく用ぬると心得

花芸見立の事

まづ大法牡丹芍薬の類は籠の花華より蓮川骨杜  
若の類は口廣とせよ水仙の類は細口物より後とて



短りりのいみじく薄端敷より一丈七寸五物の短り生公篋乃  
 敷より一丈外花と箸との取合面白くびげけと一竹と  
 生るる竹の花入紙好まざる敷ひより一丈と竹と

名物の花器挿花の事

名物の花器はうづら花賞敷とる故に葉清よゆつと挿花  
 こそぬり又他流よ云名物に花器に挿花よりよも儲蓄  
 物ぬりと挿花ば込ぬは少くは若あつゆつと挿花と  
 付んこそ成ひよと又一瓶小器よゆつと名物の花器  
 お挿花器よも挿花と挿花と又一瓶よ名物の  
 花器よ見おあつと挿花と

挨拶の花と挿花の事

先三瓶とる挿花の中の一瓶は左花清く挿花と又左  
 右に瓶一對のまじく挿花と挿花と足挨拶の花  
 ぬりよ三瓶おぬりよ色紙好む

掛物と対しと挿花の事

総て掛物の人物多敷の敷又名印と挿花ぬりよ挿花と  
 挿花ぬりよ挿花ぬりよ此外懸物よ有草花と挿花ぬりよ  
 此画の色と同く挿花ぬりよ

同懸物の画に挿花取合と挿花の事

掛物の畫はよく挿花取合面白くする事肝要也



柳 柳

山水の画よかればさるる或ハ福澤壽は布袋竹庵よをみら  
 遠藤子不栢芦北勢也外物格の心状より或ハ詩哥の意を  
 清或賢仙の人物ももそれれ此古事本状引く其縁状  
 取合作意より格くくま首へー

又既よ梅のどの画に流成りけく子卓ばりよ一瓶の  
 露成り画と見合はれ流のりまは挿る事古人も有り  
 面白作意然れども手練れよけく師格の教に似  
 ぶれ事りり

柳花用権の事 十五ヶ条 其口傳別ニ出ス

一 柳花一瓶の内は柳花の色と挿ス

但一右色状場ふもま人の画にまらりくも挿挿ると耐あり  
 柳口傳あり

一 庭前柳花挿る事

但一揚樂智古のいふもすべー  
 又右ふよりくも挿挿時は傳有

一 丘物と沃物と一瓶よりさる事

右後時又足成この事師傳之

一 水草状懸花生ふ挿る事

水中より懸れそり一足成高く是ハ産若一挿一を流たう

一 紅く此糸と一瓶は挿ス

此糸のわけはうらふと忌形り但示望やうりくも挿挿時は傳あり

一 針とげある物に挿る事

諸流も小足成之も長春本種刺の類にけありと之も流流も足成  
 挿挿れも客よあまらるるもハ料破すべー

一 白あし花弁栢栢百日紅の類挿る事

本屏院丁木どのの白好きし有はれは客をあを有り但揚樂  
 よいもくハ又栢栢百日紅のら佛場堂寺に多れ本あり

一 草ふく木瓜はふみ本として草とつむ事

流流もハ抄  
 替古獨おもすべ



一切葉挿し花と挿し事

杜若の類はあやしく挿し花に用ひる事あるは  
花の類は遠く挿し花に用ひる事あるは  
花の類は遠く挿し花に用ひる事あるは

借葉挿し花挿し事

出生の類は遠く挿し花に用ひる事あるは  
花の類は遠く挿し花に用ひる事あるは

貧相の花瓜挿し事

花葉はくましく又赤く分けらるる瓜挿し花に用情と云ふは又  
別なうり花葉の出す事

床縁より外へ花葉の出す事

花葉はくましく又赤く分けらるる瓜挿し花に用情と云ふは又  
別なうり花葉の出す事

速木の事

は之本は速木の事

根瓜はくましく又赤く分けらるる瓜挿し花に用情と云ふは又  
別なうり花葉の出す事

花器中の物挿し花挿し事

花器中の物挿し花挿し事

花器外細工の事

葉あり物葉ばり葉あり物花ごうり事

萬本より葉も花あり物葉斗葉あり物花ごうり挿し  
花ごうり立花あり花あり葉ばり用事  
挿し花あり花ごうり挿し花あり花ごうり挿し花あり



好く挿すわの又況中んゆけと夏とんかん

くすの此二草とんを花の付し葉瓜生とるなり

夏水仙 一名金燈草正月の葉生

曼珠沙花 一名石蒜 九月葉出く翌年日月枯る秋の彼葉

足出生なり故に仮葉仮花とるべ

添きれん得ん挿すの事

夏

植物瓜の付しその心得るく中づ真の山際瓜高くとん  
至一叔孫との挿方いそれ其の事とる草茎一やも  
くく物も心得るく適分とるく挿すとんとる  
草の結とる挿す極に挿なり真の本瓜挿とれく挿す

何く又真の本とて植物の根とぬきとるく又くさるも軍

のく又挿すの根一かもくぬれどより但一程く葉の

く調くぬれぬとてこれ無用なり一種とてとる挿す

草瓜挿すなり草のあり高く挿すを又本と本草

草瓜とる事もあり椿にやん伝き本なり故草のあんよ

椿瓜挿すれは挿すとて真代より葉傳し挿す好く挿す

よるあび又本瓜とる草と高く挿すあり傳なり

雜花瓜挿す得の事

雜花とる古来より挿すは通用せざる物瓜のあり客



花をいふは形り 獨樂替言の為る花はるる花は形り 葉の  
 美花をいふは形り 獨樂替言の為る花はるる花は形り 葉の  
 花の有人合さぬ時節はどかたらるる花はるる花は形り  
 雑本も是より雑本をいふは形り 雑本も是より雑本をいふは形り  
 雑本も是より雑本をいふは形り 雑本も是より雑本をいふは形り  
 雑本も是より雑本をいふは形り 雑本も是より雑本をいふは形り

實物葉をいふは形り 實物葉をいふは形り

葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り 葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り  
 葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り 葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り  
 葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り 葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り  
 葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り 葉物と先梅極の勢足は花は實をいふは形り

花は手物挿す

花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す  
 花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す  
 花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す  
 花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す 花は手物挿す

夏葉花菊挿す

夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す  
 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す  
 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す  
 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す 夏葉花菊挿す



故に安優しく挿ぐ一真に葉はふ事肝要なり  
 能く夏秋も水際より不情る葉一二枚はふ付  
 能く夏秋も水際より不情る葉一二枚はふ付

極秘傳の事

河骨挿方其方揚す此傳  
 花編は口傳と記すも秘中の秘傳なり  
 まらけ骨挿方思ふ葉は花の茎にのみ挿す大  
 わびましく互違ふむらたしく又葉の内のみ挿す  
 指のつけましく押ひらしく其後花葉もむらたしく  
 やぎん葉を水際より挿すは花の茎にのみ挿す大

仕極品のごとく

ぬかぶ  
 おひひ  
 皮と葉の付  
 りまじり



花も  
同



葉は大筋  
 指のつけましく  
 ひらく押ひらく  
 め品



苗のごとく挿すは花の茎にのみ挿す  
 但し水際より挿すは花の茎にのみ挿す  
 浜井戸形の花は編の如くすべ

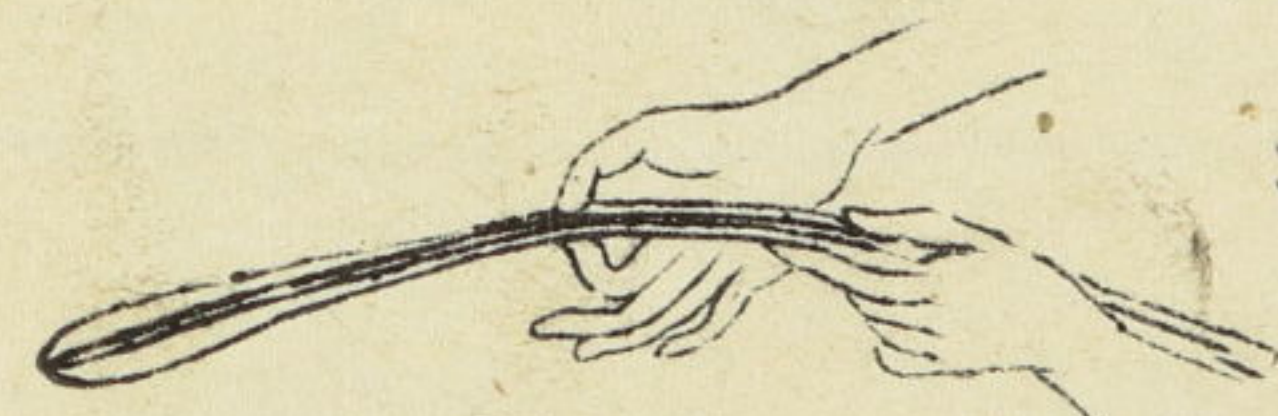
挿方の要訣とばさるる蒼と下は花は是出生なり  
 水仙さし方此傳



足も花以上より長くひきと下へをふ一茎は葉四枚なり  
 但し数お月く平水にぞよ生るけり水中なる花よりい  
 一茎あり此中より有べし又とりて交るもよあり一葉は  
 曲り付る事又花の首に引おき一極番に見ると分り



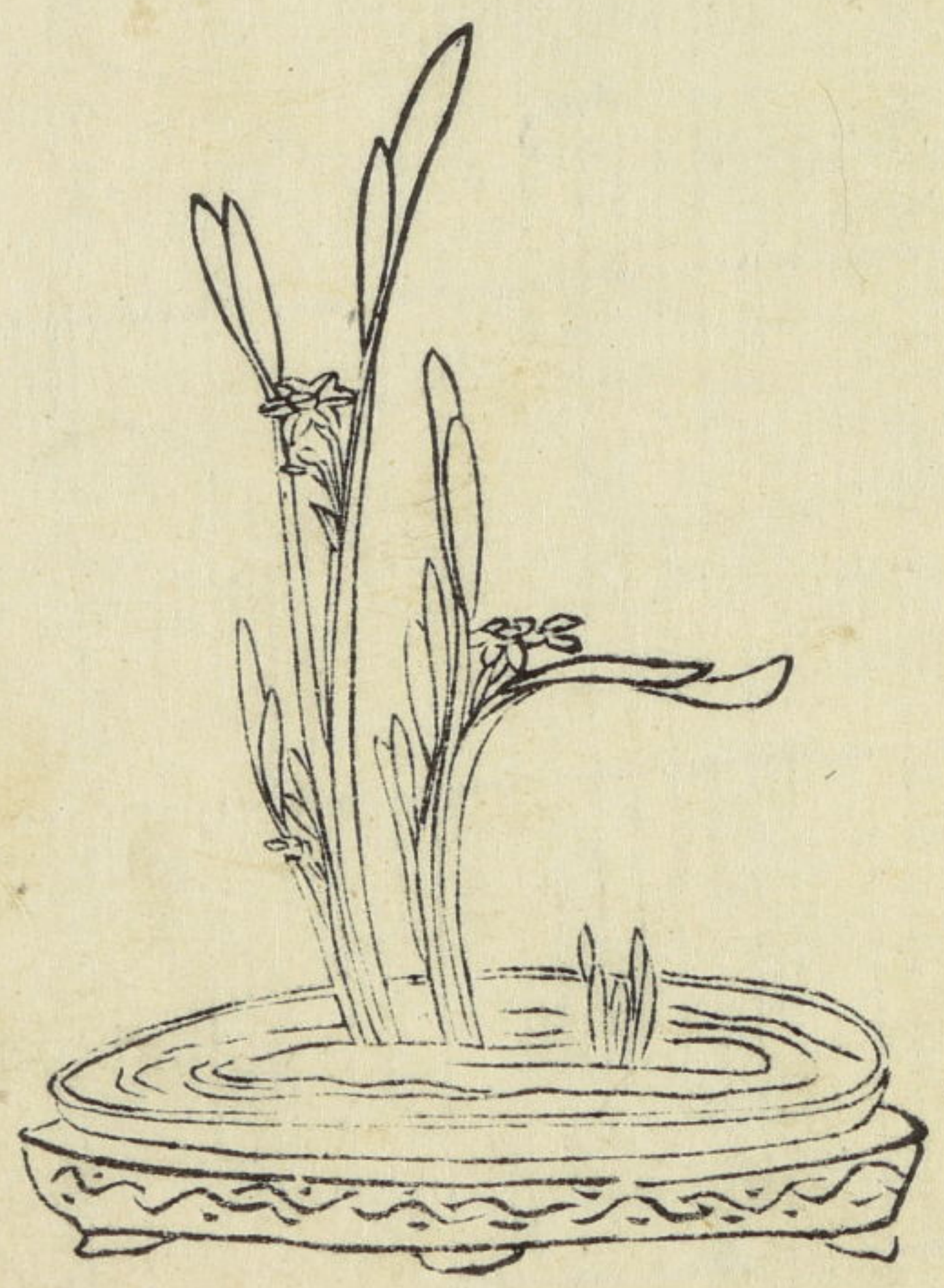
一年に用八重ハ  
 葉とく用ひ  
 先初めいと平  
 花より引ぬけハ  
 水の中へおけり



葉は中の  
 葉と葉  
 より大極の  
 つりよき  
 ひろくは  
 葉よりあり  
 花付より

花の茎も肉に志どきく垂れ  
 浮きい花葉思ひくまむつら  
 よく付しあり

水葉を  
 二枚で合  
 く左夜  
 結びて



但し初心の肉に花より一節より手おけれり  
 火より花性より思ひく形すずおけり  
 手より花性より思ひく形すずおけり



花の首えくろむく物なり時々よく瓜揚毛  
 並く花のろむじたる方状じう糸形一母挿終く  
 花の首とらうんと指くくつまみあくむぬうく長し  
 首とらうる物之終きも強くわかれ年の移りきて  
 一うくうあきる好く是手條のお秘傳の秘あり

大園挿方の傳

大園の根の志ありくよせやそれ物なり故よ其ま  
 よす年並上もどりくくゆるぬ形り是の年づ大園の根  
 代挿一根と並りうあらん思ふよりのけと挿て  
 指く根と心だつよませき紙傳くし年並より

下に挿くく瓜はだまづく糸バむつろとよく  
 よくと付なり

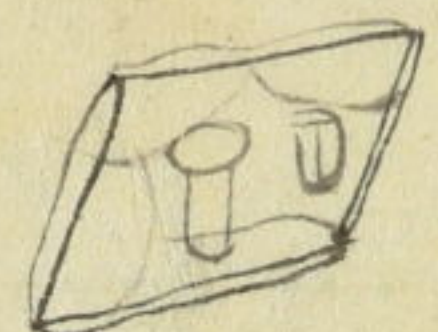
萬年青の傳

葉組を花の苗出たれも其傳ありその真の左  
 葉と花の組々葉との内は若葉二枚かじり組じ  
 左右は流し葉と葉心と葉心よと組実の葉の外は  
 是の出生なり



五葉の  
 実ハ葉の外ハ  
 如番





いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも  
但し曲葉をいづれも



いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも  
但し曲葉をいづれも

同 平御前の方傳

其石のり 皆同



此板は竹の筒に  
あててこれより  
手どろりすと  
板とて

以外苗は  
略す

紅葉挿方の傳

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも  
但し曲葉をいづれも

黄ごみ下の青葉は挿足杖のりか添お生じれば

葉蘭の挿方傳

葉蘭を日月の日は中よ生火故に其時を  
花はさび以外の時より花は添く挿もさびに  
又曲葉は時を裂葉として用も花はさび

立物と沃物の口傳

立物と沃物の事といふ是は一瓶より時を  
根をさびに魚道はさびに魚をいづれも  
立物と沃物の根をいづれも  
立物と沃物の根をいづれも



一花は根をまきりて又おきても花は後の中子魚の如く  
ほろり分ちりて付く是花の中の花の如く向ふの丘物  
瓜とてしつるは冷しりりるは湯の如く二  
種の丈は長短も是は准じりてまたとてたり

紅と紫と一花は挿傳

貴人或は母抱て花をまきりて一花は挿とて紅と紫との  
間へ赤く白く花を挿とて白く花を挿とて花の間に葉の隅に  
まきりて紅と紫と花をまきりて花の間に葉の隅に  
まきりて挿とて又紅も一花のすじは紫も一花乃  
紫の如くまきりて挿とて花の間に葉の隅に

すよ一花の如くまきりては花をまきりて二花の如く  
挿とて花の間に葉の隅に

但し一花の如くまきりては花をまきりて挿とて花の間に葉の隅に

庭前には花を挿とて

花を挿とて花の間に葉の隅に  
挿とて花の間に葉の隅に  
又花を挿とて花の間に葉の隅に  
挿とて花の間に葉の隅に

花の如くまきりて挿とて花の間に葉の隅に

先づ花をまきりて挿とて花の間に葉の隅に



花をいてはまりして花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず

花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず

花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず花つらしるはもたらず

附添 柳菴由來此事

史探花の盪觴ハ今世の柳花宗匠也家々之と云  
皆自己の見識以て種は奇説と立す我輩  
他より考明んて其計をそのみ多し或ハ佛者にて  
釋尊へ借下ると云く授は足禪林類聚の本此  
篇にも之と云り又我朝少々の舊事本記三十一卷ハ聖徳  
太子草本花實の誓書に言及ぬ授はと其後又太子始て  
一葉一葉瓶瓶ふらやハ萬物のけり免めなく中少地のつら  
陰陽和合一斛の程瓜系と云又用明天皇此御宇太子始  
て七道具以て定む瓶瓶後一粧ひのみさど之も此後の  
二説ハ皆實播と云んば拙論中華と云ハ陶淵明が



柔と愛一 周茂叔が遠派愛とる類はこれ徳孤堂の  
のふりし今此節花家と異なるなり又楊貴妃が  
花孤投臺へ抛入一 車はを投とするは流しに夏  
ちるべし亦晚明に至り姓の表名の宏道と云ふその  
いふくろ不親使と云物瓜編書と云ふ今此葉の  
挿花の助之なる車更さし續く知一 今世  
宏道流の授とする是なり又拙するは中花をも昔り  
有車もるべし今此葉も今の如く挿花の規矩なる  
車は一 我知東山殿 義政公の御時風雅ゆゑに  
市物好しく 茶花湯煙香挿花の美潔なる車

行をける也おれくみぬ其道の規矩法式既定するは  
なりし物とるなり挿花をも萬葉に其始の始なる  
車は一 末く此葉なり種く此身鏡に増補を  
其其道乃廣大形ん変と部とるなり今此葉に時代  
く此時行風俗を傳へ挿花の姿も表すなり  
流義とてつららる事なり一 志く此東山殿の御時  
池の坊立花の法式既定する時の名卷なりといふも  
即席のふりしなり今此葉も専ら行なり  
今も軍儀ありしなり故に其時代を別  
挿花はる瓜弄ひ奏樂する者連綿とる後



是令其時代より挿はるる來る而れは神も飛文  
 それは後子隨ひく味花風姿派師範く人のま  
 くすこしば遠ひる派びく一流と定めてれく  
 名を附る物あり東山殿直傳きく之法は全  
 人派歌く形るをく來速くぶぐ大當流の義政公の  
 紙巻の式法と定倍ひくと珠光の傳へ珠光より  
 征鷗の傳へ利休に至りきより以後專ら今世の風  
 姿と云ふるなり形り此道の持主其けり成知く傳説の  
 惑を解べくと角々



生花早指南後編 終

二一天作之五

最上流格奇先生著

全一冊中本  
紙員百廿枚餘有

此書は生花の先づ毎日の教る所の根柢を極めしめて八算より  
 お切刺儀を賣向新方抄に於て集め地方別も別白委愛潤平筆之形附  
 流を多しかり子も成すてもよくかまきして左作通なぐてもいふ言  
 より伝く習儀しがゆよる名人の名と云ふるも録なり

増補年中用文大成

御家流 臨泉堂先生筆 全一冊

世は用文素あまるといふも文は通して其の類は各代今も流  
 とくも流儀は江戸流の文面越は多し工事をなす流儀は流儀を  
 集む但し文字も大ききいれ日くの中向もの流儀はく用文素の大成に

金毘羅利生記

全一冊 代四拾八文

此書は金毘羅の御起きの位名方の利強は感得を云わたり然れ乃  
 州日并其の物語を記しつる此流儀は位名方の必と名流なり

江戸書林

瀬戸物町 日本橋通四丁目

越後屋長三郎 伊兵衛



